

## 研究経過報告

川上正浩

1999年の11月から2000年の10月に至る1年間の研究成果と研究経過について報告する。現在以下の4つのテーマに関心を持ち、研究を行っている。

### A. 視覚呈示された語の処理過程の検討

現在のメインテーマとして欧米諸言語において neighbor (類似語,あるいは近傍単語)と言われている“ターゲット単語を構成する文字を一字だけ他の文字に置き換えることによって作成することが可能な単語”がターゲット単語の認知過程に及ぼす影響に興味を持ち、実験を行っている。また本学人間情報学研究科の齋藤洋典教授らとのプロジェクトとしても、漢字を含めたこうした語処理過程の検討を行っている。また愛知文京女子短期大学の藤田知加子氏とも、表記形態が単語処理に及ぼす影響について検討を行っている。

共同研究も含めて、この期間に以下の発表を行った。

川上正浩 2000 漢字二字熟語の類似語が語彙判断時間に及ぼす効果—類似語数とより高頻度の類似語の有無を要因とした検討— 東海心理学会第49回大会発表論文集, 36.

齋藤洋典・川上正浩・柳瀬吉伸・増田尚史・山崎治 2000 漢字の部品頻度表の作成とそのデータベース化への試み 日本認知科学会第17回大会発表論文集, 74-75.

川上正浩 2000 漢字二字熟語の前,後漢字を共有する類似語数が語彙判断時間に及ぼす効果 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 279.

Fujita, C., & Kawakami, M. 2000 Effects of script familiarity on the recognition of Japanese script alternated words (hiragana-katakana mixed words) Proceedings of 2nd International Conference on Mental Lexicon, 31.

### B. 日本語データベースの整備

日本語を刺激材料として認知心理学的実験を行うにあたり、実験者自身の手による「使える」データベースの必要性を痛感している。この1年間でこうしたデータベ

スとして以下のものを報告した。

川上正浩 1999 漢字二字熟語の主観的出現頻度 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 245-264.

### C. “らしさ”の処理過程に関する検討

熟語らしさ,あるいは単語らしさ,といった“らしさ”をキーワードに,それを処理するための心的辞書の活用について検討を行っている。この1年間で,以下の報告を行った。

柳瀬吉伸・齋藤洋典・川上正浩 2000 語彙判断課題における熟語らしさの心的評価機構 日本認知科学会第17回大会発表論文集, 140-141.

Yanase, Y., Saito, H., & Kawakami, M. 2000 Estimation of compound-wordlikeness of two Kanji characters string in lexical decision task. Proceedings of 2nd International Conference on Mental Lexicon, 48.

### D. 学習障害児・高機能広汎性発達障害児の情報処理過程の検討

臨床場面で問題となっている学習障害児(以下LD児)や高機能広汎性発達障害児の認知機能に関する研究を中京大学の辻井正次氏,京都学園大学の行廣隆次氏,愛知文京女子短期大学の藤田知加子氏らと共同で研究を進めている。今後,認知過程からのLD児や高機能広汎性発達障害児のサブタイプ化及び対応の多様化が必要であると考えている。この1年間で以下の報告,執筆を行った。

川上正浩・辻井正次・行廣隆次 1999 情報処理アプローチによる学習障害の実験的検討—語の処理単位の視点から— 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 111-117.

行廣隆次・川上正浩 2000 認知心理学的視点から 第2章4節 齋藤久子(監修)石川道子・杉山登志郎・辻井正次(編著) 学習障害—発達の・精神医学的・教育的アプローチ— ブレーン出版 Pp.118-135.